「女の生き方」四〇選 下

山崎朋子 編

文春文庫

文春文庫

「女の生き方」四〇選　下

定価はカバーに表示してあります

1995年4月10日　第1刷

編　者　山崎朋子

発行者　堤　堯

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-714707-6

文春文庫

「女の生き方」四〇選

下

山崎朋子編

文藝春秋

「女の生き方」四〇選　下

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

美智子さまの「母の歌」　五島美代子　7
サンダカンの墓　山崎朋子　25
昏き闇より　瀬戸内晴美　50
わが愛、わが闘争　小野洋子　73
女優五〇年　田中絹代　123
訊き手　熊井啓
もしあのとき　宇野千代　144
娘の詫び状　向田邦子　150
おんなで作ろう科学の輪ッ！　楠田枝里子　155
山下由起子

喝采は「アイ・ラヴ・ユー」　中村桂子
岸恵子イランをゆく　吉成真由美
猛母・輝子との七十年　黒柳徹子　175
ニュースキャスターは女の時代　岸恵子　197
　　齋藤茂太　239
　　吉川美代子　256
賞金女王までの七年　井田由美
　　田丸美寿々
歌日記　さよなら橋本高校　岡本綾子　274
　　俵万智　293

「ここまで話したことはない」　吉本ばなな　312
私はなぜ変ったのか　都はるみ　347
わたしたちの紀子ちゃん　佐藤豊子　367
私のチャイコフスキー・コンクール体験　諏訪内晶子　389
あとがき　山崎朋子　403

写真提供　文藝春秋写真部
共同フォトサービス

美智子さまの「母の歌」

五島美代子

皇太子妃と定められた美智子さまは、四月十日の御成婚式のほとんど直前までの百日間、いわゆる皇后教育を受けられた。皇室礼法その他十課目近い教程の中にもちろん和歌の時間もあり、筆者にその和歌の御指導役の御下命があった。筆者は本当のお心もちをありのままお詠みになること、『一日一首百日の行』をお守り下さることを申し上げる。美智子さまはめきめきと上達なされ、このときのお歌百首は御成婚の御支度の中に入れられ、妃殿下から東宮殿下への最初のお贈物となった。結婚、出産、特別な御身分ゆえの御悩み――美智子さまは女性作歌の節目節目に見事にこたえられた。

中国の詩に対して、日本の歌、やまと歌、すなわち和歌というものは、不思議なくらい、皇室に関係が深い。もちろん、古典に記し残されたものに限るのだが、記紀、万葉初期にある歌は、皇族のものが、質量とも圧倒的である。その伝統を今に伝えて、たと

えば新年の歌御会始には、成年以上の皇族方は、全員揃って詠進されることになっている。したがって結婚によって皇族に列せられる方々のまず勉強しなければならないのは和歌――現代では短歌形式だけが主となっている――ということになる。

今から十五年前の秋、民間から選ばれて、皇太子妃と定められた正田美智子嬢も、翌年の一月から三月末まで、御成婚式の四月十日のほとんど直前までの百日間を、いわゆる皇后教育としての修業を千代田区三番町の宮内庁分室で励まれた。皇室礼法その他十課目近い教程の中に、和歌の時間のあったのはもちろんで、一週間に一回、二時間ずつの授業、通算して二十時間足らずのあいだに、初歩から宮中入りの技術にまで進まれなければならない。その御指導役を私にと御下命のあったとき、私はむしろ、困惑を感じなければならなかった。

夫の茂が、川田順大人の後を承けて、皇太子殿下の和歌御指南をつとめてから二十年余になっている。

殿下は戦争中奥日光御疎開の時、自発的に作歌をおはじめになった。その御指導は、従来の慣例を破って、はじめ新派歌人の中から川田順氏が選ばれた。新派――今日この言葉はおかしいが、明治三十年代の新派和歌革新運動以来の歌を新派和歌といい、宮中にそれまで動かなかった桂園派の歌人を旧派歌人といっていた。御歌所寄人が全部この旧派歌人であったのはもちろんで、大正初期、明治天皇と昭憲皇太后の御製・御歌を謹

輯するとき、佐佐木信綱先生一人が特に選ばれて、民間を代表する新派歌人として寄人の中に加えられたのであった。しかしその御事業が終るとともに佐佐木先生は寄人を拝辞され、宮中の御歌指導は依然としていわゆる旧派歌人に限られていたのであった。それを御弱年（当時十一歳）の皇太子の御作歌指導に、特に新派歌人の中から川田順氏を選ばれたのは、初代の東宮大夫穂積重遠博士の卓見によるものであったとおもう。

しかし川田氏はすぐにはお受けせず、私ども夫婦に相談にいらっした。

「親類達はみんな反対する」とたしかに仰しゃった。でもこれは、かこつけに「親類」といわれたのだと後からは思う。

当時、終戦後の日本は、「宮内庁といえば犬も振返らない時」と、さる高官が手紙を下さったのを覚えている。私どもはその頃、荒廃した吹上御苑を見せていただき、雅楽寮をも志願して拝見した。「家貧しくして云々」という古典が思い出され、孝子ではないつもりだった私が、あの荒涼たる焼跡の御所に立って、油然として皇室、日本人の総本家としての皇室への愛情のよみがえったのを覚えている。戦

美智子妃

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

時中から世界的に目覚めていた人も多かったろうが、私は全く馬鹿のように、母の残した学校と生徒をまもり、宿直の筈の先生方のだんだん来なくなる頃は夫と二人で戦うつもりで、生徒達を防空壕に入れては、夫の勤務中の昼は一人で小さい校舎の廻りを巡り、生徒達の入っている辺りの壕の土がもし崩れた時はと見まもっていた。どうして私はこんなに一所懸命に戦うのかと、キリスト教に育まれた魂にふと疑問の出る時、「でも、日本が負けたら大和言葉が失われてしまう。朝鮮留学生が自国の言葉を使えないでいるのにしみじみ同情し、又ウェールズにいった時、英語が標準語となっているため、親と子の話、子と孫の話はどうやら出来るが、祖父母と孫とはまるで話が通じないという歎きを暗然としてきいたことがある。日本が負ければ英語だけになってしまうだろう。そしたら私達の歌はアイヌのユーカラのような悲しい運命になってしまう。私は大和言葉、日本語のために戦うのだ。私達の命をかけた和歌のために、負けてはならない」そう思うと、焼夷弾の落下も何も少しも怖くなかった。

運がよかったのか、近くに軍隊のあった私どもの小さい校舎の上に来るとかならず落してゆく弾丸は、みんな風に流されて西の方にいってしまい、校舎近い林の樹が一本貫通され、一弾がガラスを破って室内に飛びこんだだけで、私どもは空襲を逃れた。銃後とはいえ命がけで戦った大和言葉。それをとり上げられずにすんだ上、少年の皇太子が自発的に歌作をなさろうという、その御指導を、当時私どもの最も尊敬していた短歌作

家の川田順氏が、どうしてためらわれるのであろうと焦心した。「是非ともお引受けなさいませ。京都からの御旅行は大変でしょうが、御親類が御反対なら本当の茅屋でも私どもにお泊り下さい」とお勧めし、第一回の御進講の前夜は、おんぼろ校舎の三畳の宿直室に泊っていただいた。私どもは裁台のかたい板のベッドで、教室の隅に寝ていたので、せめても畳敷の宿直室を清めて泊っていただいた。その室に近いポンプ式の井戸が、戦時中はこのあたり唯一の供給水で、兵隊さん達も始終汲みに来ていた。その井戸水を朝早く亡き娘が汲んで、せめて暖かいお顔洗いをと、松葉などたいたのを覚えている。

ひのみこに侍らひをればあらかねの地も光りてしら雪流る

五島美代子

第一回御進講の日の川田氏の歌である。その時少年の皇太子が、

「御苦労！」と仰せられた声が耳もとをはなれないと、川田氏は感激していられたが、私どもには少し奇異な思いがした。

その後川田氏は、お米を背負って立ち通しの汽車に揺られて、月一回東宮御所に上られた。私どものあばら屋にこりら

れたのか、御親類の反対というのは私どもの気を引いてみるための嘘だったのか、毎回御本家に泊られたようだったが、やがて例の「老いらくの恋」以来、世の非難に先んじて職を拝辞し、後任として夫茂を推薦されたのは、右のような事情によるものと思う。夫は川田氏の信任と、穂積大夫・野村先生・小泉信三氏等の御支援によってお役目を承って以来、少年皇太子のお人柄に魅せられ、二十余年の間にはその歌境の著しく進まれていることをいつも誇りにしていたので、その御配偶たるべき未来の妃殿下のお歌は、少なくとも殿下と並んで著しい差がなく、たがいに理解しあわれるようにとの周囲の配慮から、私に御用命が下ったのだと思う。

ここで一言お断りしておきたいのは、川田氏の感激された、

「御苦労！」というお言葉である。川田氏が御自分なりに翻訳してきかされたのか、あるいはあの時代は戦後直後で、殿下はきまり通りの挨拶をなさったのかもしれない。

それで夫がはじめて東宮御所に上って帰った時、私は先ず「殿下、『ごくろう』と仰しゃって？」ときいたものだった。「そんなこと仰しゃるものか。ちゃんと、『ありがとう。どうぞよろしゅう』と仰しゃったよ」という。

これは妃殿下から後に伺ったことだが、殿下は英国女王の戴冠式に御列席の時、さまざまの御苦労と見聞を重ねられた。そして御帰朝の後は御自分の考えで、東宮職内のすべての習慣を改められた。侍従や女官を一々「さん」づけでお呼びになること、正式の

時は別として、軽井沢では上から下まで一様のお献立で、「私どもも殿下とおんなじ食事をいただいているのです」と、今は停年になった歌人の内舎人（うどねり）が、夫に歌を見て貰いに来るたび話しておられた。

「皇后教育」という大きな見出しで事が伝わると、他の方々とともに私も幾たびかジャーナリストの訪問や質問を受けた。

「どんな風にして未来の妃殿下を教えるんですか？」「どういう方針で？」と口々にきかれるのに、

「妃殿下にでも別に変ることはありませんわ。宅に来て下さるお嬢さん達にとおんなじことを申上げようと思います。でも、三カ月という日数が短すぎるので、どういう風にしたらいいかは考え中ですけれど――」と答えるうち、次第に私の決心はついていった。そうだ。相手はどなたでも、私の歌についての考え方は変る筈はない。「一日一首百日の行」など説いて来た責任からも、三カ月で出来ない筈はない。いのちがけでもしてみようという気持が次第に動かなくなっていった。

しかし、私は正直いって内心は困惑していた。まだお目にかかったことのない美智子嬢は、新聞等の報道によれば「欠点のないのが欠点」というほど、満点な方だという。そんな完全無欠な人などに、私のおもう本当の歌が創れようか。欠点もあり、弱い人間だからこそ、歌が生めるのだ。満点をつけられる高貴の人などに、よい歌は出来そうも

ないし、第一私にそんな方の御指導など不可能なことだと、私はおもった。才みじかく、苦しみ悩んで長年歌に救われて来たからこそ私は、苦しみ悩む人間の魂の叫び、弱い女の唯一の助けとすがりつく作歌には力を貸しても来られた。それらの中で、本当に本気に私の求めるような短歌の創作にはげんで来た者の中には、病んで中道に仆(たお)れる者も多かった。そんな烈しい修業の道を妃殿下に強いることが出来ないとすれば、私は美智子嬢の御指導をお引受けするために自分の道に妥協しなければならない。そんな事は決して出来はしない。

「お国のためになる事だから、しっかりなさい」と、私の国文学の指導教授で、恩師佐佐木信綱先生の女婿にあたられる久松潜一先生ははげまして下さった。お国のためになることと、自分の命がけの道への執念と、両立させることが果してできるだろうか——。

忘れもしない昭和三十四年一月十九日、宮内庁分室内の教室で、はじめて未来の妃殿下にお目にかかった。その前、浜尾侍従を通じて、「歌については何も知らない。まったくの初心だから、よろしくたのむ」とのお言伝てがあったので、そのように謙虚な御心もちならと、いくぶん和む心はあったのだが、一目お見上げした瞬間に、私の今までの懸念はあともなく飛び去ってしまった。

さくらの花片そのままにふくよかなお顔を染めて、うつむいていらっしゃる、匂うような処女(おとめ)、お上げになると人のこころの奥まで沁(し)み入ってくるような深い眸(ひとみ)のいろ、は

ずかしそうでお可愛くなってしまうような、つつましやかな態度、欠点のないのが欠点などと御自分では思いもよらぬような姿である。

魅せられてしまいそうな心を引きしめて、私は、むしろ強い口調で申上げようとした。

御授業時間が十回きりなくて、よほど一所懸命にしていただかなければならないこと、それにはこれから申上げる三つのことを、お守り下さいますかということ。

「先日の新聞に、皇居にはじめて御参内の時、お化粧しないでゆきたいのだが、と仰せられたとございましたが、本当でございますか」とおききすると、はっきり「はい」とおうなずきになった。

「礼儀の上からそうも遊ばせなかったでしょうけれど、その御こころもち、一番お大事な時にありのままの素顔でいらっしゃりたいという、そのお気持が、お歌の上にも一番大事なことでございます」と私は、ふるえそうになりながらいっしょうけんめいに申上げた。

「歌をつくるに虚飾はいらない。はずかしくても苦しくても、ありのままの自分を神の前にさらすような気持でお歌いにならなくてはいけない。御身分を忘れ、人ぎきのよいように上手な歌を作ろうなど思わず、醜いところも神に懺悔するような心でお歌いにならなければいけない。その代り、私は、神父が信者の告解を決して人に洩らさないように、医者が患者のカルテを絶対人に見せないように決してお作を人には知らせません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton